

[No.28 忘れられない3つの音楽祭]

夜は真夏でも冷える。南仏のリゾート地、エクサンプロヴァンスの夜9時は、昼間のギシギシとした暑さはどこへやら、すっかりと肌寒い。ナントカ伯爵の広大な邸宅の敷地内では、そこここに置かれたたいまつが芝生に影を落とし始め、散らばって立つ多くの小さな家屋に、コンサートに訪れた人々が吸い込まれていく。

男性は燕尾服にコート、女性はイヴニングドレスの上に毛皮のケープかハーフコート。それぞれの小さな家の窓から漏れるほのかな灯りと音楽、ピアノの音が聞こえるかと思えば、少し離れた家からはフルートの音色、私自身はどこで何を歌ったのだろう。自分の演奏が終わると、着替えもせずにコートを羽織って、他の演奏を聴きに行った。

なんだか映画のワンシーンのように聞こえるかもしれないが、実際、演奏する側として参加していた私にとっても、あまりにも優雅で、おとぎ話か美しい夢のような雰囲気になり満ち溢れた一晩だった。

今年は猛暑が襲っていた地域である。昔訪れた南仏では、レンタカーには冷房などついていなかったから、昼間にほんのちょっと駐車するにも、必死に日陰を探したことを思い出す。それでも夕方からの涼しさは格別だったからよかったが、今年の夏は、友人たちも含め皆、いったいどこでどうして過ごしたのだろう。

自然災害のもとでは、私たちはただ途方に暮れるばかり。何年も続いているはずのエクサンプロヴァンスの音楽祭の一環、夜の霧の中の、夢のような「伯爵邸の音楽会」は今年もあったのだろうか、また開催されるのだろうか。

忘れられない二つ目の音楽祭は、以前、HPでのエッセイ No.21「音楽とチーズの音楽祭」としてかなり詳しく書いたもので、ここでは名前だけ記すことにしよう。

オーストリアの田舎、シュヴァルツエンベルクの「シューベルティアード」である。

そしてここにもう一つ、どうしても特筆しておきたい音楽祭は、やはりオーストリア、「ノイベルク アン デア ミュルツ」。

シュヴァルツエンベルクが「田舎」とすれば、ここは田舎も田舎、周りは畑や牧場ばかり、泊まるところも一軒しかない。それも、ホテルというより、レストラン付きではあるが、大き目の農家の部屋をいくつかリノベーションした感じだ。そこに宿

泊するのは、音楽祭の間はほとんどが出演者とその家族ばかり。車で来る聴衆は、どこか郊外に場所を探すのだろう。

コンサートをする場所は、村の真ん中にある大きくて歴史ある古い教会と、素朴なホールが一つ。もちろん「音楽祭」と名付けるには、あまりにも規模は小さいが、一週間という期間中、比較的近いウィーンから結構著名な演奏家も参加する。それゆえ各地から訪れるコアなファンもいる。

ただ、私にとって特別だったのはコンサートそのものではない。ここに一軒しかない「宿泊所」は音楽祭の間こそ部屋は満杯だが、普段は村の人たちが集まる集会所であり、夜に一杯やる酒場でもある。

コンサートが終わった後、長々続くワイワイとした仲間同士の食事会も楽しいが、真夜中の12時に教会の鐘が鳴ると、どこからか続々と人が集まってきた。ふと耳をそばだてる。「mu- mu- mu-」という音の響きが聞こえる。

近くに住む農家のオトコたちが15, 6人、ちょっとハーモニーを確かめると、突然アカペラでその地方の民謡やら、「仕事歌」や知られている合唱曲などを歌い始めた。その美しいことと言ったら！ 初めて聴いたときは、あまりのサプライズに言葉を失った！ 心がゾクゾクした。

後で聞いた話では、これは「いつものこと」なのだそう。仕事や夕食を終えた近くの農家の男性たちが、真夜中になると集まって30分ほど合唱するのが、一日の終わりの定番の楽しみとか。男性のアカペラコーラスだ。(なぜか女性はいない。)

ピアノは置いていないし、もちろん誰も「絶対音感」などないはずなのに、そのハーモニーはとにかくきれいで温かく美しい。「音楽する」ことが特別なことではなく、文字通り「歌を楽しんで」いるのが伝わる。音楽の原点でもある。

ここに滞在していた間、真夜中の教会の鐘の音を毎晩楽しみに(食事のあと一杯やりながら！)待った。彼らの、心を解きほぐす自然な美しい歌声を聴くために。

もしかしたら、今ではこの小さな「音楽祭」そのものはなくなってしまったかもしれないが、彼らの歌声は変わらずに、あの酒場宿から響いているはずだ。

